歴代誌
第一と第二現代の聖書では 2 つに分かれていますが
最初からそうだったわけではありません 巻物の長さの関係で 2 つに分けられました
が 元は一つの物語を書いた一つの
書だったのです また現代の聖書では歴代誌はサムエル
記と列王記の後ろにあって内容 の大部分もその二つの書と重複
しています そのため現代の読者はこの書を
この内容はもう読んだと思って 飛ばしてしまいがちなのですが
それは実にもったいないことです なぜならこの書は聖書の中でも
重要で特徴的な書だからです ユダヤの聖書タナクの伝統的な
配置では 歴代誌は一番最後に来ます
というのもこの書はタナクのすべて を要約しているからです
この書の最初のことばは聖書の 冒頭の物語の登場人物の名前
アダムで 最後の段落にはイスラエルが捕
囚から帰還したことが書かれて います
この書の著者はわかりませんが 内容や記述から
これがバビロン捕囚からイスラエル 人が帰還して
数百年後の時代の人物によって 書かれたことがわかります
著者の時代から見ると エルサレムと神殿はしばらく前に
再建されていますが エズラ記やネヘミヤ記からは
状況があまりよくなかったこと がわかります
エルサレムと神殿が再建されそこ では神が民の間に住み
メシアなる王が到来しすべての 国々が
その平和な統治の元に暮らすという 大いなる預言がありましたが
そのどれもがまだ実現していません でした
そこで歴代誌の著者は未来に対する 希望を語るために
ダビデやソロモンや過去の王たちの 物語を改めて紡ぎ直しました
その際著者が二つのテーマを強調 していることがわかります
一つ目は来るべきメシアなる王の 希望で
二つ目が新しい神殿の希望です この書のいたるところにそのテーマ
が見つかるはずです では詳しく見ていきましょう
第一歴代誌は 9 章に及ぶ系図で始まり ます
延々と続く名前の羅列を読むと 読者は退屈に感じるかもしれません
それ は無理もないことですが
実はここにはとても重要な意味 があるのです
著者は聖書の鍵となる登場人物 を挙げていくことで

旧約聖書全体の話の流れを要約 しまた
そうすることによって系図の中で 二つの血筋を強調しているのです
まずは約束されたメシアなる王の 血筋で
ユダの家系を念入りにたどって います
これはメシアに関する約束が与 えられた
ダビデ王につながっていきます そこから著者はダビデの血筋を
自分の時代までたどります もう一つ詳しく書かれている血
筋は アロンの子孫で神殿に仕える祭
司の家柄のものです このようにメシアが来て神殿を
再建するという 2 つのテーマが最初から見えてき
ます それはすべてこの系図に基づいている
のです 次に著者はダビデの物語を記しています
これらの多くはサムエル記で読む ことができるものですが
ここには重要な違いがあるのです まず著者はダビデの弱さや不道徳
な行いなど ネガティブな面は一切書いていません
例えばサウルに追い回され苦しめ られた話や
バテシェバとの不倫や彼女の夫 を殺したことなどは省かれています
書かれているのはダビデの良い 面ばかりで
さらにサムエル記にはないような ダビデの功績などが付け加えられて
いて ダビデが神殿建築の準備のために
材料や職人レビ人や 合唱隊を集めておいた話が詳しく
書かれています しかも著者はダビデをモーセのような
人物として描き 神がモーセに幕屋を建てるよう
命じたように ダビデに神殿建築の計画を与えた
という書き方をしているのです なぜわざわざこれを書き加えた
のでしょう 著者はサムエル記を読めば分かって
しまう ダビデの落ち度を隠そうとした
わけではありません ダビデを彼の子孫から出る未来の
メシアのイメージ あるいは型とするために理想の王
として描いたのです これはエレミヤやエゼキエルが
来るべきメシアを新しいダビデ として描いたのと同様です
そのことはダビデに対する神の 契約の約束について
改めて語っている第一歴代誌 17 章で明確にされています
第二サムエル記 7 章の平行箇所を読む と著者は
ダビデもソロモンも彼らの子孫 のほかのどの王も
メシアなる王ではなかったと強調 しています

しかし来るべきメシアはダビデ のような王になるのです
著者にとっては過去のダビデの物語 は
未来に対する彼の希望を支える ものだったのです
ダビデが死んだところで第二歴代 誌が始まり
そこではエルサレムに暮らした 王たちについて書かれています
これらも第一第二列王記と重複 しますが
大きな違いもたくさんあります 北イスラエル王国の王たちの話
は全て省略され ダビデの家系にのみ焦点が当て
られているのです 著者は神に従順だった王たちを
取り上げ その従順が彼らを成功に導いた
という新しい話を書いています 同時に神に不誠実でトーラーに従
わず イスラエルを偶像礼拝に導いた
王たちのことも取り上げ 彼らが直面した悲劇そしてやが
てのバビロン捕囚は 彼ら自身が招いた結果だと言って
います このようにこのセクション全体
が 登場人物についての学びとなって
いて 著者は後の世代が先祖の歴史から
学び 神とトーラーに誠実でいることを
願っているのです この書のエンディングも独創的
です ペルシャのキュロス王が捕囚だった
イスラエルの民に 故郷への帰還を許し街と神殿を
再建するようにと言います そして彼がこの書の一番最後で
こう言います 主の民にはその神主が共にいて
くださり その者たちは上って行くように
尻切れトンボのようにこの書は 終わるのです
著者はもちろん 最初に帰還した民とエズラやネ
ヘミヤの物語を知っていますが 預言された希望はその物語の中
では成就しなかったと考えています この
唐突なエンディングは 著者がメシアがやがて来られて
神殿を再建し 神の民を回復する別の帰還に希望
を置いていることを 示しているのです
このようにしてタナクの中では 一番最後にあるこの書は
未来を指し示して終わっています 歴代誌は未来を見るために過去
を振り返ることを促しています それは過去が未来の希望の根拠
になっているからです この書はエンディングを追い求め
ながら 旧約聖書を閉じていますこれが歴代誌です

500 字要約

歴代誌は、歴史的には第一と第二の部分に分かれており、元々は一つの物語でしたが、巻物の長さの都合で分割されました。現代の聖書では、歴代誌はサムエル記と列王記の後ろに配置され、内容の大部分がこれらの二つの書と重複しています。しかし、これを読者が飛ばしがちなのはもったいないことであり、なぜなら歴代誌は聖書の中でも重要で特徴的な書であり、タナク（ユダヤの聖書）の伝統的な配置では最後に来るため、タナク全体を要約しています。

歴代誌の著者は、バビロン捕囚から数百年後の時代の人物であると考えられ、その時代にはエルサレムと神殿が再建されていましたが、エズラ記やネヘミヤ記からは状況があまり良くなかったことが分かります。そのため、著者は未来に対する希望を語るために、過去の王たちの物語を改めて紡ぎ直しました。

歴代誌の著者が強調している二つのテーマは、一つ目は来るべきメシアなる王の希望であり、二つ目は新しい神殿の希望です。これらのテーマは、系図の中で強調され、ダビデの家系を通じてメシアと神殿の再建が関連付けられています。

また、歴代誌はダビデ王の物語を詳しく記述しており、著者はダビデのネガティブな面を省き、彼を理想的な王として描いています。このようにして、著者はダビデを未来のメシアのイメージとして描き、彼の物語を通じてメシアの希望を表現しています。

さらに、歴代誌はエルサレムに暮らした王たちの物語を紹介し、神に従順な王と不誠実な王の対比を通じて、信仰と従順の大切さを強調しています。

最後に、歴代誌のエンディングは、ペルシャのキュロス王によるイスラエルの帰還と神殿の再建を示しており、著者は未来に対する希望を締めくくっています。

歴代誌は、過去を振り返りながら未来の希望を示す書であり、タナク全体の要約として位置づけられています。